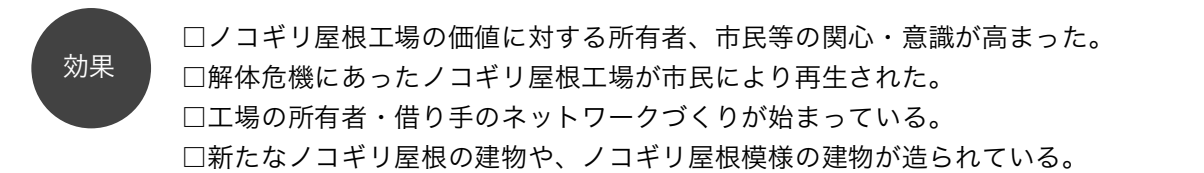
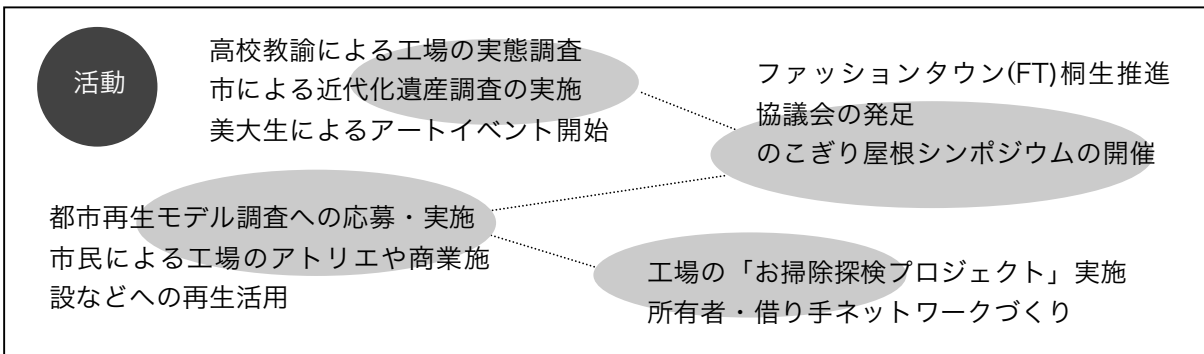
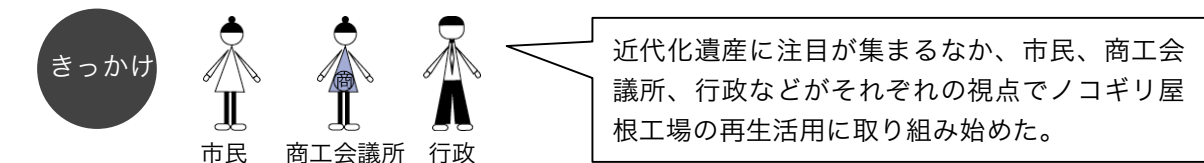
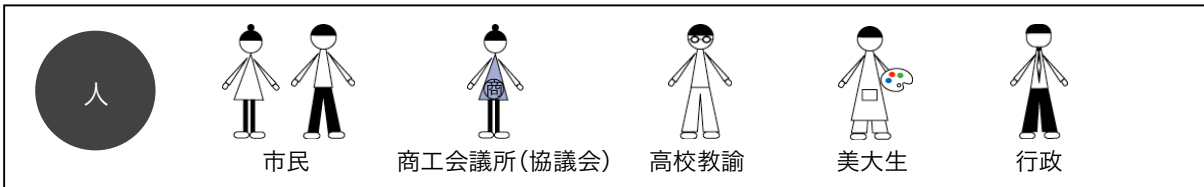




桐生には、ノコギリ型の屋根が印象的な工場が町中に建ち並んでいます。しかし、市民にとっては当たり前の風景であるが故に、使われなくなった工場は次々と壊されていきました。

そんなとき、まちの活性化を模索するなかで、市民、商工会議所、行政がそれぞれの視点からノコギリ屋根工場の価値に気付き始め、再生活用に乗り出します。

ノコギリ屋根工場は、織物だけでなく、アートや食料品など、さまざまなものづくりの場として新たに活躍を始めています。

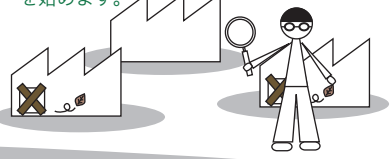


高校教諭・市民	美術大学生	商工会議所・FT 推進協議	行政
<ul style="list-style-type: none"> ○ノコギリ屋根工場の実態調査(教諭) ○ノコギリ屋根工場のアトリエ等への再生活用(市民) ○アートイベントへの協力(市民) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ノコギリ屋根工場などを会場としたアートイベントの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ○シンポジウムの開催 ○都市再生も出る調査への応募・調査 ○所有者・借り手のネットワークづくり ○お掃除探検プロジェクトの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ○市内の近代化遺産調査の実施 ○ノコギリ屋根工場の国登録有形文化財への登録

1983

地元の高校教諭が市内のノコギリ屋根工場の実態調査を始めます。

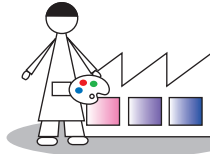
ノコギリ屋根工場の実態解明だ



1984

今あるものを活かす…!

町づくりフォーラム



東京の美術大学生が桐生のまち並みや建物を舞台に、制作活動を行っています。ノコギリ屋根工場も会場となり、多くの作品が生まれています。

まちを元気にしたい

ファッションタウン構想



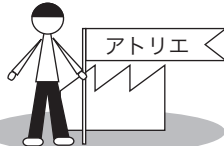
地域の産業”ものづくり”と”まちづくり”が一体となって、地域の活性化を図ろうと考えます。

県の近代化遺産調査を受けて、市でも独自の調査を行い、その結果、多くの近代化遺産が確認され、「近代化遺産拠点都市」を宣言します。



近代化遺産と歴史的まち並みを活かしたまちづくりについて、行政と市民で討議が行われました。

空き工場をアトリエに



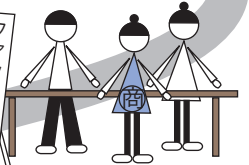
フォーラムでの講演に刺激を受けた所有者の1人が、工場をアトリエに再生させました。

1987

ノコギリ屋根特徴かな

桐生の資源何だろう

ファッションタウン推進協議会



推進協議会において、地域資源の掘り起こしを行い、その中でノコギリ屋根工場が浮かび上がってきました。

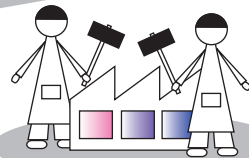
ノコギリ屋根工場関心高いな



まちのすてきな風景を市民が推薦する取り組みが始まります。ここでもノコギリ屋根工場が多く取り上げられます。

これを一つの軸に!

ノコギリ屋根工場再生活用



美大生たちは拠点としていたノコギリ屋根工場を自分たちの手で改装し、蘇らせます。

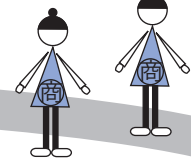
意見交換を

シンポジウム
のこぎり屋根のあるまち

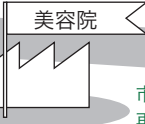


まちづくりの先駆者である向島と西陣の人たちを招いて、シンポジウムを開催しました。

所有者同士をネットワークつくる



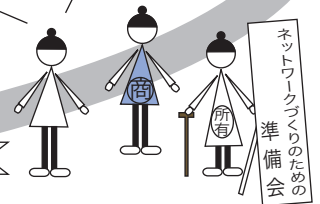
シンポジウムでの話を受けて、工場の所有者のネットワークづくりに動き始めます。



市民の手で、美容院に再生されました。

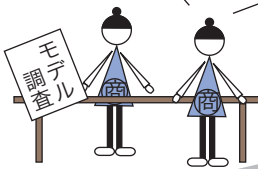
みなどう考えているのかな

なかなか所有者集まらない



資源としての可能性は?

活用事例は?



工場の可能性や役割、活用事例も調査されました。



モデル調査には、地元の高校生も協力しています。

この事業に応募しよう

全件調査だ



国が実施する「都市再生モデル調査」に応募し、採択されました。

博物館

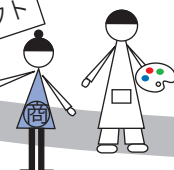
市民により、博物館に再生されました。

残したい人多いよ

2007

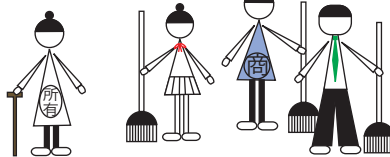
工場の掃除しながら交流のきっかけに

お掃除探検プロジェクト



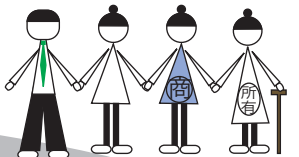
この工場も悪くないかも…

中に入ったの初めてだ



荒れていた工場がきれいになることで、所有者の気持ちにも変化が生まれてきました。

それぞれできること、連携することも必要だね



残したい所有者は多いのに、ネットワークづくりは進まない…。それならまず、所有者とのつながりをつくらせよう、工場の掃除をみんなでやるイベントを実施します。

ベーカリー

市民の手で、ベーカリーに生まれ変わりました。

□ 景観まちづくりの3原則からみた成功のポイント □

原則1 《地域性》 歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

● 地域の発展を支えてきたノコギリ屋根工場に着目したまちづくり

- ・ ノコギリ屋根工場は、明治から昭和にかけて、桐生で営まれてきた繊維産業の工場として建てられ、桐生の近代化と発展を象徴するものです。200棟以上が現存し、その数は日本一ともいわれています。屋根がノコギリの歯に似た形をしていて、屋根の傾斜面（主に北側部分）から採光することで、一定の光を工場内に取り込むことができる造りになっています。
- ・ しかし、桐生に住む人にとっては、ノコギリ屋根工場はごく当たり前の風景で、それが特徴ある風景だという認識は、当初は非常に薄いものでした。
- ・ そんななか、桐生のまちづくりを考える過程で、ノコギリ屋根工場が地域資源として注目を浴び始め、現在ではまちづくりの一つの核となっています。

>> 見慣れたまちの景観のなかにある魅力や価値には気づきにくい面があります。そのような場合には、まちの歴史文化を見直し、特徴や個性を明らかにすることで、そこにあるものの価値を再認識することができます。



桐生市内のノコギリ屋根工場



屋根の採光窓

● アートイベント「桐生再演」を通じたノコギリ屋根工場の価値の再発見

- ・ 「桐生再演」は、平成6年から、東京の美術大学の学生や卒業生を中心に、桐生市内の住宅や工場、川辺などを会場として行っているアートイベントです。学生自らが作品づくりを行う場所を、まちを歩いて探すのですが、ノコギリ屋根工場が度々会場として取り上げられ、そこからさまざまな作品が生み出されています。
- ・ 会場として使われた際には、学生らによって掃除やメンテナンスが行われたり、作品の展示のためにこれまでと異なる使い方をされたりして、所有者に対しても工場の持つ新たな側面に気付かせてくれる機会となっています。

>> 外の人から地域の良さ、まちなかにあるさまざまなものの価値を評価してもらうことで、なかからは気づきにくいまちの魅力を発見できます。

>> アートイベントという、日常とは隔たったものを通して地域資源を見ることで、いつもとは異なった空間、モノとして捉えることができ、新たな価値に気づきやすくなることも考えられます。

原則2《推進体制》 早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

●ファッションタウン桐生推進協議会における地域資源の掘り起こし

- ・ 桐生市の商工会議所では、平成5年にファッションタウン構想を策定し、その推進母体となるファッションタウン桐生推進協議会を、産業界・教育機関・市民などの参加のもと、立ち上げます。
- ・ そして、推進協議会のなかで地域資源の掘り起こしを行い、そこで浮かび上がってきたのがノコギリ屋根工場でした。
- ・ これには、桐生市による近代化遺産の調査、商工会議所による「わがまち風景賞」の実施、フォーラムの開催などが背景にあり、これ以降、ノコギリ屋根工場の再生活用を大きな軸として活動が行われていきます。

>>しっかりと地域資源の掘り起こしに取り組むことで、自分たちのまちにはどんなものがあり、それをどのような位置づけとするのかを明確にすることができます。そしてそれにより、景観まちづくりの軸に何を据えていくのかを明らかにすることができます。

●広く市民に周知するための講演イベントの開催

- ・ 平成4年に桐生市により「桐生の町づくりフォーラム」、平成12年に推進協議会により「町づくりセミナー」、平成14年には商工会議所と推進協議会によりシンポジウム「のこぎり屋根のあるまち・桐生からの発信」が開催され、多くの市民の参加を得ています。
- ・ 講演をきっかけに、ノコギリ屋根工場の所有者が再生活用に取り組み始めたり、推進協議会では全件調査に乗り出したりと、イベントの開催が新たな動きを誘発する、いいきっかけになっています。

>>シンポジウム等を開催することで、より多くの人に一度に活動内容を伝えることができます。活動に携わっている人には、取り組みを振り返る機会となり、それ以外の人には、活動を知ってもらう機会となります。

●ノコギリ屋根工場の所有者のネットワークづくり

- ・ 商工会議所と推進協議会の主催で行ったシンポジウムを通じて、所有者のネットワークや借り手の情報共有するための連携組織をつくろうという動きが始まりました。
- ・ 建物を再生活用しようとするとき、行政が建物を借り上げて、利用したい人に貸し出すという方法も考えられます。しかし、ノコギリ屋根工場はすべて個人所有であり、数も多く、広く活用しているとするときには、個別に対応していくよりも、ネットワーク組織を介した方が取り組みやすく、また、情報の共有も容易に行えます。
- ・ 推進協議会を中心に、連携組織立ち上げのための準備会や所有者との交流を深めるためにイベントなど、ネットワークをつくるための活動が進められています。

>>地域資源の活用を行っていく際には、所有者同士や借り手、あるいは専門家、行政などの間にネットワークがあると円滑に進むことが期待できます。

●都市再生モデル調査への応募・調査によるノコギリ屋根工場の実態把握

- ・ 商工会議所と推進協議会では、工場の所有者のネットワークづくりに向けて、ノコギリ屋根工場全件の実態把握に乗り出そうと、内閣官房都市再生本部により実施されている「全国都市再生モデル調査」に応募し、採択されました。全件調査では、市内の工業高校にも協力してもらい、実測調査を行っています。

- ・この調査を通じて、市内には237棟のノコギリ屋根工場が現存していることが確認され、また、所有者の8割が工場を残していきたいと考えていることも明らかになりました。

>>国や各自自治体が主催するモデル調査等を利用して調査を行うことは、独自に調査を行うことが難しい場合にも、いいきっかけになりますし、あるいは、高校や大学等の協力を得て行うことも、専門的な観点からの調査も可能となり、活動を進めていくのに有効でしょう。また、このような調査では、調査費用が補助されるものもあり、資金的に課題がある場合にも有効です。

>>調査結果が広く公表されることで、自分たちの活動を広く内外にアピールする機会にもなります。

●それぞれの得意分野を活かして活動する

- ・ノコギリ屋根工場の再生活用の取り組みにおいて、商工会議所とファッションタウン桐生推進協議会は、調査の実施やシンポジウムの開催などのPR活動を中心とした取り組みを、所有者・借り手を中心とした市民は、アトリエ等への再生活用などの実践的な取り組みを、行政は近代化遺産としての保存の取り組みなど、それぞれの得意分野で活動を続けています。

>>商工会議所、市民、行政等には、それぞれの役割・立場で得意とする活動内容があり、それを着実に進めていくことも、景観まちづくりを進めていくのに必要なことです。そして、これらが連携して進めていくことが、活動がさらに発展していくためには大切です。

原則3 《実現性》 計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

●「わがまち風景賞」によるまちの魅力の発見

- ・「わがまち風景賞」は、市内の良質な風景を創出しているものを市民から募集、表彰し、まちなみ保存と活用や、市民の都市風景に対する意識を高めることを目的として、商工会議所により実施されています。応募作品のなかには、ノコギリ屋根工場の写真も多く見られ、市民が改めて意識することがなくても、ノコギリ屋根工場のある風景を美しいもの、特徴あるものと捉えていることがわかりました。
- ・ここでノコギリ屋根工場を写した写真が多かったことは、推進協議会において、ノコギリ屋根工場の再生活用にスポットを当てるきっかけの一つにもなっています。
- ・また、作品のなかには、商工会議所の人も知らなかったようなものや風景を被写体としているものもあり、それらは、まちの新たな魅力の発見にもつながっています。

>>市民が、自分の住むまちの写真や絵画に応募する機会を設けることは、自分たちのまちがどんなところであるのか、どんなものが特徴としてあげられるのか、何が魅力なのかなど、まちをよく見たり考えたりするきっかけになります。

●「お掃除探検プロジェクト」を通じて所有者とのつながりをつくる

- ・所有者とのネットワークをつくるためには、まず所有者との間につながりをつくる必要があります。そのための方策として考えられたのが「お掃除探検プロジェクト」でした。これは、長く使われていなかった工場の掃除をしようというイベントで、「桐生再演」で使用した工場を、美大生らが掃除し、メンテナンスを行っていたことにヒントを得ています。

- ・ 工場の所有者と、「桐生再演」にも携わっている学生や行政、市民などさまざまな年齢や立場の人たちが協力して掃除に取り組むことで、参加した人は外から見るだけだった工場に身近に触れることができ、また、所有者は工場がきれいになることで、まだ使えるのではないかと、価値があるのではないかと、工場を見直すことにつながっています。

>>会議形式だと人が集まりにくい場合には、イベントのようにしてきっかけをつくるのは有効です。市民が気軽に参加できる状況・仕組みをつくるのが、活動が広がっていくためには必要です。

>>長年放置されるなどして価値を見出せていないときでも、整備されることで、そのものの存在を見直すことにつながっていくことが期待できます。

●市民によるノコギリ屋根工場の再生活用

- ・ 調査活動が進められている一方、桐生のまちなかには、民間（市民）が手がけた活用事例がいくつも見られます。美容院や飲食店、アーティストのアトリエに転用されるなど、生まれ変わった工場の姿は、市民に工場の新しい可能性を示しています。
- ・ なかには、ノコギリ屋根型の建物が新築されたり、屋根にノコギリの模様が入った建物が建てられたりと、広く市民にも、地域の顔としてノコギリ屋根が認識されてきていることがうかがえます。



工場を再生活用したアトリエ

>>まちなかに、実際に再生活用した事例、成功事例があると、他の市民もイメージしやすくなり、関心を高めるためにも有効です。

●再生活用された工場の登録有形文化財への登録

- ・ 都市再生モデル調査後、5件のノコギリ屋根工場が国の登録有形文化財に登録されました。登録有形文化財は、外観のみの保存を対象としており、指定された工場は、アトリエや美容院など、新たな用途で活用がなされているものも含まれています。

>>法や条例による文化財等の指定がなされることで、関心の薄かった市民にも、広くわかりやすく価値があるものだとアピールすることができます。

>>法や条例による保護にも、許可制度等の強い規制のかかるものから、指導・助言を基本とする緩やかなものまで、幅広く用意されています。対象となるものに適した制度を選ぶことが大切です。